

2024年2月1日(木) 曇

予報では今日一日曇りマーク、晴れるのは明日の午後になりそう。でも気温は高めで、あまり寒くない。今年は旧暦の元日が10日(土)。三連休の初日。まずはゆったり迎えられそう。

— 努力目標 —

自分で何か始めたい人の相談にのるのは仕事ではあるけど、社会学習にもなっている。“聞いてみないとわからないものだ、人の人生は…”というのは常で、“人間とは何と”と考えさせられること、多々。

時には初耳のモノ、コト、知の領域などがある。「水」に特別な名前がついていて、高価なモノとして扱われていたり、人生を変える特別なメソッドだとして、仰々しい名前で資格ビジネスを展開していたり。

さっそくネット検索してみる。情報はすぐに出てくる。まずはどういう企業または人がやっているのかを見る。その他、いくつかみるポイントがある。「ほんもの」かどうかを見定めようとする。

ただほとんどは、“これでは…”と疑問符がついた。“人の弱みにつけこんで”と苦々しく思うこともある。とはいえ、信じている人に対して否定はできない。人の人生に立ち入ることはできない。

その上で助言することになる。そのモノ、コト、メソッドだけで、人の抱える問題を解決できるものはないこと、バランス感覚をもつこと、自分を律する必要があることなどを、言葉を選びながら、けっこう力説する。

バランス感覚、自律。人を支える仕事をする者には、大事な努力目標ではないか。

— 2月1日の「モンテーニュ」 —

偉大な人物だったプトレマイオスは、われわれの世界の限界をだ定めておいた。そして古代の哲学者たちの全員が、彼らの認識から逃れる可能性のあるいくつかの離れ島を別にして、世界の寸法を確定したと考えたのだ。……それが、われわれの世紀になって、ひとつの島とか、ひとつの個別の地方とかいうものでなく、われわれの知っている部分とほとんど匹敵する大きさの一つの部分、果てもない大きさを持つ確固とした大地の一部分が最近になって発見されたのだ。

それなのに、当代の地理学者たちは、今日すべては発見された、すべては目撃されたと確信するjこを欠かさない。……まったくの話、昔プトレマイオスが、彼の論拠にとったかずかずの根拠にもとづいて結局まちがいをしでかしたのだから、今これらの学者たちが言っていることを信じるのは愚かしいことではないか。

ー2月2日の「モンテーニュ」ー

天空の星々は、三千年のあいだ動いてきた。だれもがそう考えていたが、サモスのアリストアルコスが、またテオフラストスによればシュラクサイのニケタスが、大地のほうこそ、みずからの軸のまわりを廻りながら黄道の斜めの環に沿って動いているのだという考えを立てることに思いいたった。

そして今日、コペルニクスがこの学説をじつに見事に基礎づけ、それを天文学上のあらゆる結果に対してひじょうに規則正しく適用している。

しかし、そこからわれわれがとりだすべきものは、これらの二つのうちのどちらが正当かということはわれわれにとって別に重要ではない、ということ以外の何なのか。そしてまた、今から千年ののち、第三の説が現れてこれら二つの先行する説をひっくりかえさないと誰が知ろう。

ー2月3日の「モンテーニュ」ー

多少の誇張がないわけではないにしても、わたしは、あらゆる人間をわたしの同胞と考えている。そして、フランス人と同じようにポーランド人を抱擁し、国の連繫を普遍的な共通の連繫より後ろに置く。

2024年2月5日(月) 雨

大阪は朝から雨。あがるのは夜になりそう。昨日は曇り空に時々晴れ。その時の陽ざしが春めいてりた。さすが立春。

ー〈話せる〉ー

中小企業診断士の一次試験科目にかつて「助言理論」が入っていた時期があった。その前に受験したから、勉強はしていないが、カウンセリングの知識と技能を学ぶ。今の試験にはもうなくなったようだけど、この仕事には欠かせない素養。

カウンセリングも、起業相談では時々心理カウンセラーの役目をはしているように感じることもある。起業は人生の大きな選択、決断。憧れだけで起業して続くものはないし、中には消去法で起業を思い立つ人もいるから、よくよく話を聴く必要がある。

起業して社歴がそれ相当の年月になっても、経営者の悩みは尽きない。環境変化は常で、不確実なことばかりなのだから、休息はしながらも、新しいアプローチをやり続けなければならない。そのアプローチも、正しい選択だったかどうか、先にならしてみないとわからないのがほとんど。

でも自分を信じ、やると決めて、やれば、『自己成就の効果が期待できる』、とはフランスの数学者の言葉。

もう決めたことだけど、その過程を一部始終を話してもらおうという場面がよくある。「傾聴」しながら、時々コメントもする。“自分の気持ちをしっかり固めるための一つの儀式だろうなあ…”と、思う。〈話せる〉相手であり続けられるよう努めよう。

—2月5日の「モンテニュー」—

ひとりの人間が12時間で、風に乗って東から西へ飛んでいったというよりは、ふたりの人間が嘘をついているとこのほうが、どれほどずっと自然で本当らしく思えることだろう。

われわれ人間のうちのひとりが、箒の上にまたがって、暖炉の煙突の先から、生身の肉も骨もそのまま、なにかよその妖精のはたらきによって飛びたっていったというよりは、道を踏みはずしたわれわれ自身の精神が動揺を起こして、理解力が変なところへ場所を変えたのだということのほうが、どれほど自然に沿ったところだろう。

—2月6日の「モンテニュー」—

外にある、未知の幻影を探し求めないようにしようではないか。われわれは、自分の中の、われわれ自身のかずかずの幻影によって絶え間なくゆる動かされているのだから。

わたしは、人が、不思議なことを信じなくても許されると思う。少なくとも、不思議でない自然の道筋を通して、そういうものの証明をしないで済むよう廻って避け、無しにすることができるときは、許されると思う。

2024年2月7日(水) 雨

大阪は朝から雨。あがるのは夜になりそう。昨日は曇り空に時々晴れ。その時の陽ざしが春めいてりた。さすが立春。

— 自分の代 —

自分の国を出た人の方が自国の風習や文化を残しているということがよくある。むかし韓国で一般的だった旧盆前の、親戚総出でやるお墓の草取り作業も、今は稀といわれる。

法事もまたしかりで、いつかチェジュの親戚に、親がやっていたようにやっていると言ったら、ここではもうそんな風にはしない、といって簡略化する方法を教えてくれた。そうしてもう10年ほどなる。

それにしても、自分の代になるとやるようになるもの。親がやっていた時はただただ指示されるままに手伝っていただけなのに…。自分の時間もとられて、面倒、というぐらいに感じていたのに。

でも上の代がいなくなってみると、自然に同じようにやらなければという気になるから、おもしろい。こうして風習や家系というのが連なっていくんだなあと、すごく腑に落ちた感じがした。

父は早世だったから、「親がやっていた」という親は母になる。子どもの目から見ても、それほど人間ができた親ではなかったけど、何か根本的なところでは、できていたということは認められるから、やるようになったのかもしれない、ちょっと「上から目線」だけど。

3日に立春レターを配信して届いた返信に、とうとう「独り立ちになりました」という方がいらした。こちらからまた、「自分の代になられたのですね」と返した。今度は自分から次の代につなぐ。ああ、人に、家系に、歴史あり。

2024年2月13日(火) 晴れ

朝からよく晴れて、澄んだ青空がひろがる。旧暦でも年が明け、新旧ともに新春。気温は15℃まで上がるらしい、朝はいつもより寒く感じたけど。いよいよ、春がくる。

— 春愁、春の門出 —

立春もすぎ、旧暦でも年が明け、名実ともに新春、梅の開花もすすむ。今週は4月並みの気温になるらしい。でも来週はまた寒いとか。

俳句の季語にもなっているという「春愁」。秋もそうだけど、気温の寒暖と陽ざしの明暗の微妙なアンバランスさが心に愁いを誘うんじゃないか。個人的にはそうみている。暑くなってくると、愁うどころじゃなくなるから、春愁のセンシティブさをうまく掬いあげて、アートな、クリエイティブな時間をもてばいい。

さてこの時期に人生の大きな決断をする人も少なくない。年末年始のうちに、そんなことを考え、年が明けて心を決め、4月からの心機一転を期す。何年か越しの決断なら、「その時が来た!」ということだろう。気持ちがそう向いたのだから、やり続けられる。試行錯誤、悪銭苦闘は付きものだけど、それを乗り越えさせる肝がすわったはずだから。

そうして始めた人に時々いうこと、「時には前向きな諦めが必要」。それによってまた新しい視界が開ける。ところで、こう書きながらふと思ったことだけど、「肝がすわる」と「前向きな諦め」は一对、背中な合わせの関係ではないか。

—2月13日の「モンテニュー」—完

(著者本文結び)

メッセージが誤りなく送達され、コミュニケーションが完全に成立するなどのことがあり得ないのは自明であって、虚偽、韜晦、誹謗、策略すらその回路を通過する。

むしろそのようなものこそが大部分を占めるとすら思わないではない時に、遠く離れ、時をへだてた源から、何かわからない道筋に沿って、わずかな伝言の束がもたらされる。

例示といい、範示というが、その何らかの一片、一端がこちらの胸に灯をともし。それも、かならず、常に起る作用ではないとすれば、手にとどくわずかのものは限りなくとおしい。

受け手は自分の弁別と聴取の特質を存分に高めて、真実、率直、明智、清朗をたたえたメッセージを受けとれれば幸せだ。そのように思い知る者に、モンテニューは語りかける。「自分でためしてみたまえ」と。

2024年2月16日(金) 曇→晴

今週前半はよく晴れ、気温も水曜日は18度を超えた。昨日は雨だったけど、冷たくはなくて、今朝もさほど寒くなかった。でも今日の日中は10度どまり。体調管理に要注意。

— 『偶然性と運命』 —

6年前の夏に仕事で出会った人、その半年後だったか、ある本を譲った。自分ならではの業を模索していて、話を聴くうちに、かつて自分の読んだ本が役に立つのではないかと感じたのだった。

先日久ぶりにご本人に会った。「以前、本をくださったこと、憶えていらっしゃいますか?」、「もちろん、〇〇」とタイトルを即答した。「その本がいま輝いてみえるんです」。

この5年間もずっと探究を続けてきた、昨年からは新しい学びに取り組んでいる、その学びにもらった本のテーマがつかついている、なんとも、「この本がいま自分の手元にあるのが、不思議で…」。そういう話だった。

自分のことのように気持ちがよくわかる、同じようなことを経験してきているから。その一つ、二つを話して、「これからあなたの自業の物語がどんどん綴られていきますよ」と励ました。

『偶然性と運命』(木田元2001年4月岩波新書)を読んでノートにメモしている日付をみると、出版年の5月4日。たぶん新聞に載った広告をみてすぐ買ったのだと思う。

1991年の独立から10年目、この間に〈偶然〉を思い知ることが何度となくあった。自業の序章を飾り、本章を彩る貴重な出会い、出来事。不思議なものだという感覚が極まっている時期だった。

今では〈偶然〉も自分がつくっていることだと考えている。いま「不思議で…」の中にいるかの人も、いずれそう感じるようになるのではないか。いつかまたそんな話を聴けることをたのしみにしておこう。

—2月19日 『中井久夫集3』より

「こだわり」は意地ほど烈しい視野狭窄をもっていないだろう。それは戦後の進歩かもしれない。意地は、もう少し不幸な時代や状況の産物かもしれない。「こだわっている」程度の人は家庭裁判所や精神科に登場しないであろう。